

## 「第二の人生～夢の実現へ」

ウィルあいち交流ネット参加グループ

気迫あふれる戦いぶりで「野獣」の異名を取り、2012年ロンドン五輪柔道女子金メダリスト松本薫さんが2月7日引退した。彼女の戦いぶりは、闘魂を野獣と化し、相手を精神面から打ちのめすアスリートであった。柔道の夢「金メダル」という目標は達成され、結婚、出産し子の親となった。その時から子供が柔道より優先順位が上となったと話していた。体力の限界や試合の結果が出せなかったことも要因ではあるともいっていたが、私の耳に残ったのは、「アイスクリームづくります！」の言葉だった。彼女は、現役時代からアイス好きで、体調に気を使うスポーツ選手でも食べられるように「体にいいアイスを作りたい」と引退後の道として決めた。アイスには、白砂糖、小麦粉を使わず、ココナッツミルクや豆乳をベースにした。これは、アレルギーがある子供のアイスとしての母となった彼女の思いがあるのかもしれない。彼女は、子育てをしながら、第二の人生の在り方の選択を考え、周りの手助けを借りて、本当にやりたかったことを実現させたのである。2月12日の開店は作業着姿でお客様を笑顔で迎える「野獣」時代が考えられないほどの転身ぶりは素敵だと思った。今女性が結婚・出産を期に仕事をやめ、子育てが本業となる人生に疑問を抱く女性もいる中で、彼女の全く違う第二の人生の選択から本当になりたい自分の夢の実現に向け、頑張ってみたくなる勇気をもらった気がする。経済的な面もあるが、女性がアサーティブになって、夢が言えて、それを応援してくれる人や団体があれば、今の社会的問題も解決の糸口になっていくのではないだろうか。女性たち、あなたの夢はなんですか！夢を現実へ

カラ・カクテ16 白谷隆子

- \*さわらび会
- \*メンズリブ名古屋
- \*女性学”98の会
- \*IPA
- \*メディアの会かたつむり
- \*ウィル10
- \*グループ・キートス
- \*クラリネット”99
- \*2000女性学の会
- \*ウィル2000
- \*I. W. L
- \*ウィル・ミニ・ボックス
- \*ウィルD○2002
- \*平成いちご会
- \*きらら2005
- \*サーティネット’05
- \*ベリーズ18
- \*Step07
- \*トライアングル’08
- \*Fem.’09
- \*Amelie’10
- \*なでしこAICHI
- \*AIC25
- \*ウィルウィル14
- \*ひかるよ’15
- \*カラ・カクテ16
- \*そうだね2017  
(設立順)

ウィルあいち交流ネットとは…

ウィルあいちセミナー等の受講修了生による自主活動グループで組織された団体です。



## ジェンダー主流化の20年 ～グローバルな枠組みの基本原則に～

国際社会にとって喫緊の課題である「気候変動」。近年、ジェンダー主流化の動きが急速に進んでいます。

1992年に開催されたリオ・サミット（環境と開発に関する国際連合会議）で、国連気候変動枠組条約が採択され、国際的な枠組みが設定されました。温室効果ガスの削減・吸収の促進を通じた「緩和策」と、気候変化の影響を軽減し、備える「適応策」を両輪とした対策が進められています。「緩和策」には、省エネ、再生可能エネルギーの開発・普及、森林保全など植物による二酸化炭素の吸収などが含まれます。「適応策」には、防災インフラの整備、農作物の品種改良・新種開発、渇水・治水対策などがあります。

気候変動自体は、男性も女性も関係ない「現象」ですが、気候変動から受ける影響は、男性と女性で異なります。例えば、砂漠化が進むと近隣の水源が干上がり、より遠くの水を汲みに行きます。森林資源が減少すると、煮炊きに使う薪をより遠くまで採取しに行きます。水汲み・薪集めは女性の役割とされている地域が多いので、無償労働の時間と量が増加し、健康を損なったり、教育・経済活動・政治への参加の妨げになったりと、女性のエンパワーメントの阻害要因になりうるのです。また、「緩和策」として森林保全を進めると、食料や収入源を森林の資源（水、薪、キノコ類、果物、ハーブ、シアバターなど）に頼っている女性たちの生活を直撃します。

ところが、気候変動対策の中心であるインフラ、エネルギー、農業、自然資源管理といったセクターは、従来「男性」の専門家、実務家、政策策定者が多い領域です。ジェンダー専門家、女性団体、一部の国際機関がジェンダー視点の重要性を指摘しつつも、主流化からは程遠い状況が続きました。

しかし、2015年の第21回気候変動枠組条約締約国会議（COP21）で、2020年以降の新たな法的枠組みとして採択された「パリ協定」の前文には、気候変動対策におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメントの重要性が明記されました。

途上国の森林劣化を食い止めることで温室効果ガスの抑制を図り、同時に持続可能な森林経営を進める取り組みを支援するREDD +は「ジェンダー視点に立ったガイダンスノート」を制作。現地住民の生活への悪影響を防ぐための措置（セーフガード）項目においても「女性」を重要なコンポーネントと位置付けています。

2017年には、気候変動対策への国際的な資金メカニズムである「緑の気候基金」（Green Climate Fund）は、ジェンダー分析に基づく「ジェンダー評価」（ジェンダー・アセスメント）と「ジェンダー行動計画」の提出を資金要請の必須要件としました。UN Women（国連女性機関）と共同でジェンダー主流化マニュアルを制作・普及しています。

この動きの背景には、「ジェンダー主流化」がエビデンス・ベースの政策立案・事業計画を実行するための手段であるという認識の高まりがあります。対象地域の「性別役割分担」と「（土地、現金、設備などの）生産資源へのアクセスとコントロールの度合いの違い」を可視化し、その背景にある「ジェンダー規範」を特定し、それを踏まえて事業を計画することが求められているのです。それらの要素がプロジェクトの成果を左右するからです。言い換えれば、ジェンダー分析の無いものは「エビデンスを欠いた事業計画」とであると判断されるのです。

共同参画より

Gender Action Platform理事 大崎麻子氏

### [編集後記]

寒いですね。インフルエンザもはしかも猛威を振っています。どうぞお体を大切に。

S.I

編集発行：ウィルあいち交流ネット

編集協力：(公財)あいち男女共同参画財団